

森
鷗
外

鷄



鷄

石田小介が少佐参謀になって小倉こくらに着任したのは六月二十四日であった。

徳山と門司もじとの間を交通している蒸気船から上がったのが午前三時である。地方の軍隊は送迎がなかなか手厚いことを知っていたから、石田はその頃の通常礼装というのをして、勲章を佩おびていた。故参の大尉参謀が同僚を代表して棧橋さんばしまで来ていた。

雨がどつどと降っている。これから小倉までは汽車で一時間は掛からない。川卯かわうという家で飯を焚たかせて食う。

夜が明けてから、大尉は走り廻って、切符の世話やら荷物
の世話やらしてくれる。

汽車の窓からは、崖がけの上にびっしり立て並べてある小
家が見える。どの家も戸を開あけ放して、女や子供が殆ほとん
ど裸でいる。中には丁度朝飯を食っている家もある。仲なか為し
のような為事しごとをする労働者の家だと士官が話して聞せ
た。

田圃たんぼの中に出る。稲の植附あぜみちはもう済んでい
る。蓑みのを着て手籠たごを担いで畔道あぜみちをあるいている農夫が見え
る。

段々小倉が近くなつて来る。最初に見える人家は旭町あさひまちの遊廓ゆうかくである。どの家にも二階の欄干に赤い布団が掛け
てある。こんな日に干すのでもあるまい。毎日降るのだから、
こうして曝さらすのであろう。

がらがらと音がして、汽車が紫川むらさきがわの鉄道橋を渡ると、
間もなく小倉の停車場に着く。参謀長を始め、大勢の出
迎人がある。一同にそこそこに挨拶をして、室町むろまちの達見たつみ
という宿屋にはいった。

隊から来ている従卒に手伝って貰って、石田は早速正
装きかに着更かえて司令部へ出た。その頃は申告しかたの為方ななんぞ

は極きまっていなかつたが、廉かどあつて上官に謁えつする時とい
うので、着任の挨拶は正装ですることになつていた。

翌日も雨が降っている。鍛冶かじ町に借家があるというの
を見に行く。砂地であるのに、道普請に石炭屑くずを使うの
で、薄墨色の水が町を流れている。

借屋は町の南側になつている。生垣で囲んだ、相応な
屋敷である。庭には石炭屑を敷かないので、綺麗きれいな砂が
降るだけの雨を皆吸い込んで、濡れたとも見えずにいる。
真中に大きな百日紅さるすべりの木がある。垣の方に寄つて夾竹桃きょうちくとう
が五六本立っている。

車から降りるのを見ていたと見えて、家主が出て来て案内をする。渋紙しぶかみ色の顔をした、萎しなびた爺じいさんである。

石田は防水布の雨あまおおい覆を脱いで、門口を這はい入いって、脱いだ雨覆を裏返して巻いて縁端えんばなに置こうとすると、爺さんが手に取った。石田は縁を濡らさない用心かと思いつながら、爺さんの顔を見た。爺さんは言訣いいわけのように、この辺へんは往来から見える処ところに物を置くのは危険だということ話を話した。石田が長靴を脱ぐと、爺さんは長靴も一しよに持って先に立った。

石田は爺さんに案内せられて家を見た。この土地の家

は大小の違ちがいがあるばかりで、どの家も皆同じ平面図に依よって建てたように出来ている。門口を這入って左側が外壁そとかべで、家は右の方へ長方形に延びている。その長方形が表側と裏側とに分れていて、裏側が勝手になっているのである。

東京から来た石田の目には、先まず柱が鉄丹べんがらか何かで、代たい緒しやのような色に塗ってあるのが異様に感ぜられた。しかし不快だとも思わない。唯この家なんぞは建ててから余り年数を経たものではないらしいのに、何となく古い、時代のある家のように思われる。それでこんな家に住ん

でいたら、気が落ち付くだろうというような心持がした。

表側は、玄関から次の間まを経て、右に突き当る西の詰つめが一番好い座敷で、床の間が附いている。爺さんは「一寸ちよつと御免なさい」と云って、勝手へ往いったが、外套がいとうと靴とを置いて、座布団と烟草盆たばこぼんとを持って出て来た。そして百日紅の植わっている庭の方の雨戸が疎まばらに締まっているのを、がらがらと繰り開けた。庭は内から見れば、割合に広い。爺さんは生垣を指ざして、この辺は要塞ようさいが近いので石堀いしべいや煉瓦堀れんがべいを築くことはやかましいが、表だけは立派にしたいと思つて問い合せてみたら、低い堀は築い

ても好いそうだから、その内都合をしてどうかしようと思っ
ていると話した。

表通は中ちゆうくらしいの横町で、向いの平家の低い窓が生垣すきまの透間から見える。窓には竹たけすだれ簾が掛けてある。その中で糸を引いている音がふうんふうんとねむたそうに聞えている。

石田は座布団を敷居の上に敷いて、柱に靠より掛かって膝ひざを立てて、ポケットから金天狗きんてんぐを出して一本吸い附けた。爺さんは縁端にしゃがんで何か言っていたが、いつか家の話が家賃の話になり、家賃の話が身の上話にな

った。この薄井という爺さんは夫婦で西隣に住んでいる。遅く出来た息子が豊津の中学に入れてある。この家を人に貸して、暮しを立ててせがれの学資を出さねばならないということである。

それから裏側の方の間取を見た。こちらは西の詰つめが小さい間まになっている。その次が稍やや広い。この二間が表側の床の間のある座敷の裏になっている。表側の次の間と玄関との裏が、半ば土間になっている台所である。井戸は土間の隅に掘ってある。

縁側に出て見れば、裏庭は表庭の三倍位の広さである。

所々に蜜柑みかんの木があつて、小さい実が沢山生なっている。
 縁に近い処には、瓦かわらで築いた花壇があつて、菊が造つ
 てある。その傍そばに円石まるいしを置んだ井戸があつて、どの石の
 隙間すきまからも赤い蟹かにが覗のぞいている。花壇の向うは畠はたけにな
 っていて、その西の隅に別当部屋の附いた厩うまやがある。
 花壇の上にも、畠の上にも、蜜柑の木の周囲まわりにも、蜜蜂みつばち
 が沢山飛んでるので、石田は大そう蜜蜂の多い処だと
 思って爺さんに問うて見た。これは爺さんが飼っている
 ので、巢は東側の外壁に吊つり下げてあるのであつた。
 石田はこれだけ見て、一旦いったん爺さんに別れて帰つたが、

家はかなり気に入ったので、宿屋のお上かみさんに頼んで、細かい事を取り極めて貰って、二三日立って引き越した。横浜から舟に載せた馬も着いていたので、別当に引き入れさせた。

勝手道具を買う。膳ぜんわんを買う。蚊帳かやを買う。買いに行くのは従卒の島村である。

家主はまめな爺さんで、来ているいろいろ世話を焼いてくれる。膳ぜんわんを買うとき、爺さんが問うた。

「何人前いまするかの。」

「二人前です。」

「下のものはいいりませんか。」

「僕のと下女のとで二人前です。従卒は隊で食います。別当も自分で遣るのです。」

蚊帳は自分のと下女のと別当のと三張買った。その時も爺さんが問うた。

「布団はいりませんか。」

「毛布があります。」

万事こんな風である。それでも五十円程掛かった。

女中を傭うというので、宿屋の達見のお上さんが口入屋の上さんをよこしてくれた。石田は婆あさんを置

きたいという注文をした。時という五十ばかりの婆あさんが来た。夫婦で小学校の教員の弁当をこしらえているもので、その婆あさんの方が来てくれたのだそうだ。不思議に饒舌しやべらない。黙って台所をしてくれる。

二三日立った。毎日雨は降ったり歇やんだりしている。石田は雨覆をはおって馬で司令部あられたに出る。東京から新に傭って来た別当の虎吉が、始ともて伴をするとき、こう云った。

「旦那だんな。馬の合羽かっぱがありませんがなあ。」
「有る。」

「ええ。それは鞍くらだけにかぶせる小さい奴ならあります。旦那の膝に掛けるのがありません。」

「そんなものはいらない。」

「それでもお膝が濡れます。どこの旦那も持っています。」

「膝いなんざあ濡れても好い。馬装に膝掛いなんというものはない。外の人は持つておつても、己おれはいらない。」

「へへへへ。それでは野木さんのお流義で。」

「己おれがいらないのだ。野木閣下の事はどうか知らん。」

「へえ。」

その後は別当も敢て言わない。

石田は司令部から引掛ひきがけに、師団長はじめ上官の家の名刺を出す。その頃は都督ととくがおられたので、それへも名刺を出す。中には面会せられる方かたもある。内へ帰ってみると、部下のものが名刺を置きに来るので、いつでも二三枚ずつはある。商人が手土産なんぞを置いて帰ったものもある。そうすると、石田はすぐに島村に持たせて返しに遣る。それだから、島村は物を貰うのを苦に病んでいて、自分のいる時に持って来たのは大抵受け取らない。

或日帰って見ると、島村と押問答をしているものがある。相手は百姓らしい風体ふうていの男である。見れば鶏の生き

たのを一羽持っている。その男が、石田を見ると、ここにこして傍そばへ寄つて来て、こう云つた。

「少佐殿。お見忘になりましたか知れませんが、戦地でお世話になった輜重輸卒しちようゆそつの麻生あそうでござります。」

「うむ。軍司令部にいた麻生か。」

「はい。」

「どうして来た。」

「予備役になりましたして帰っております。内は大里だいりでござります。少佐殿におなりになって、こちらへお出いでだということをお聞きしましたので、御機嫌うかがい伺うかがいに参りました。」

これは沢山飼っております内の一羽でござりますが、丁度好い頃のでござりますから、持って上りました。」

「ふむ。立派な鳥だなあ。それは徴発ではあるまいな。」
麻生は五分刈の頭を搔かいた。

「恐れ入ります。ついみんなが徴発徴発と申すもんでござりますから、ああいうことを申しましてお叱しかりを受けました。」

「それでも貴様はあれきり、支那人シナの物を取らんようになつたから感心だ。」

「全くお蔭かげを持ちまして心得違を致しませんものですか

ら、凱旋がいせんいたしますまで、どの位肩身が広がったか知れ
 ません。大連だいれんでみんなが背囊はいのうを調べられましたときも、
 銀の簪かんざしが出たり、女の着物が出たりして恥を搔く中で、
 わたくしだけはおおいばり大息張でござりました。あの金州きんしゅうの鶏
 なんぞは、ちゃんが、ほい、又お叱を受け損う処でござ
 りました、支那人が逃げた跡に、卵を抱いていたので、主ぬし
 はないのだと申しますのに、そんならその主のない家に
 持って行って置いて来いと仰おっしやったのには、実に驚き
 ましたのでござります。」

「はははは。己は頑固だからなあ。」

「どう致しまして。あれがわたくしの一生の教訓になりましたのでござりました。もうお暇いとまを致します。」

「泊って行かんか。己の内は戦地と同じで御馳走はないが。」

「奥様はいらっしゃりませんか。」

「妻さいは此間こないだ死んだ。」

「へえ。それはどうも。」

「島村が知っているが、まるで戦地のような暮しを遣っているのだ。」

「それは御不自由でいらっしゃりましょう。つまらない

ことを申し上げて、お召替のお邪魔を致しました。これでお暇を致します。」

麻生は鶏を島村に渡して、わらじ鞋をびちやびちや言わせ
て帰って行った。

石田は長靴を脱いで上がる。雨覆を脱いで島村にわたす。島村は雨覆と靴を持って勝手へ行く。石田は西の詰の間に這入って、床の間の前に往って、帽をそこに据えてある将校行李こうりの上に置く。軍刀を床の間に横に置く。これを初て来た日に、お時婆あさんが床の壁に立て掛けて、叱られたのである。立てた物は倒れることがある。

倒れれば刀が傷む。壁にも痕が附くかも知れないというのである。

床の間の前には、子供が手習に使うような机が据えてある。その前に毛布が畳んで敷いてある。石田は夏衣袴のまままで毛布の上に胡坐を搔いた。そこへ勝手から婆あさんが出て来た。

「鳥はどうしなさりまするかの。」

「飯の菜がないのか。」

「茄子に隠元豆が煮えておりまするが。」

「それで好い。」

「鳥は。」

「鳥は生かして置け。」

「はい。」

婆あさんは腹の中で、相変らず吝嗇けちな人だと思った。

この婆あさんの観察した処では、石田に二つの性質がある。一つは吝嗇である。肴さかなは長浜の女が盤台はんだいを頭の上に乗せて売りに来るのであるが、まだ小鯛こだいを一度しか買わない。野菜が旨うまいといっているので、胡瓜きゅうりや茄子ばかり食っている。酒はまるで呑のまない。菓子は一度買って来いと云われて、名物の鶴の子を買って来た処が、「まずいな

あ」と云いながら皆平たいらげてしまつて、それきり買つて来いと云わない。今一つは馬鹿だということである。物の直段ねだんが分らない。いくらと云つても黙つて払う。人が土産を持って来るのを一々返しに遣る。婆あさんは先ずこれだけの観察をしているのである。

婆あさんが立つとき、石田は「湯が取つてあるか」と云つた。「はい」と云つて、婆あさんは勝手へ引込んだ。

石田は、裏側の詰の間に出る。ここには水指みずさしと漱茶碗うがいちやわんと湯を取つた金盥かなだらとバケツとが置いてある。これは初の日から極めてあるので、朝晩とも同じである。

石田は先ず楊枝ようじを使う。漱をする。湯で顔を洗う。石鹼せっけんは七十銭位の舶来品を使っている。何故なぜそんな贅沢ぜいたくをするかと人が問うと、石鹼は石鹼でなくてはいけない、贗物にせものを使う位なら使わないと云っている。五分刈頭を洗う。それから裸になって体じゅうを丁寧に揩ふく。同じ金盥で下湯しもゆを使う。足を洗う。人が穢きたないと云うと、己の体は清潔だと云っている。湯をバケツに棄てる。水をその跡に取って手拭を洗う。水を棄てる。手拭を絞って金盥を揩く。又手拭を絞って掛ける。一日に二度ずつこれだけの事をする。湯屋には行かない。その代り戦地でも舎営

をしている間は、これだけの事を廃せないのである。

石田は襦袢袴下じゆばんこしたを着替えて又夏衣袴を着た。常の日は、寝巻ゆかたに湯帷子ゆかたを着るまで、このままである。それを客が来て見て、「野木さんの流義か」と云うと、「野木閣下の事は知らない」と云うのである。

机の前に据わる。膳が出る。どんなにゆっくり食つても、十五分より長く掛かったことはない。

外を見れば雨が歇やんでいる。石田は起たつて台所に出た。飯を食っている婆あさんが箸はしを置くのを見て「用ではない」と云いながら、土間に降りる縁えんに出た。土間には虎

吉が鳥に米を蒔まいて遣しやつて、蹲しゃがんで見ている。石田も鳥を見に出たのである。

大きな雄鷄おんどりである。総身の羽が赤褐色で、頸くびに柑こうじいろ子色の領卷くびまきがあつて、黒い尾を長く垂れている。

虎吉は人の悪そうな青黒い顔を挙げて、ぎよろりとした目で主人を見て、こう云つた。

「旦那。こいつは肉が軟やわらかですぜ。」

「食うのではない。」

「へえ。飼つて置くのですか。」

「うむ。」

「そんなら、大屋さんの物置に伏籠ふせごの明いているのがあったから、あれを借りて来ましょう。」

「買うまでは借りても好い。」

こう云って置いて、石田は居間に帰って、刀を吊つって、帽を被かぶって玄関に出た。玄関には島村が磨こいて置いた長靴がある。それを庭に卸して穿はく。がたがたいう音を聞き付けて婆あさんが出て来た。

「お外套がいたうは。」

「すぐ帰るからいらん。」

石田は鍛冶町を西へ真直に鳥町まで出た。そこに此間こないだ

名刺を置いて歩いたとき見て置いた鳥屋がある。そこで
牝鷄めんどりを一羽買って、伏籠を職人に注文して貰うように頼
んだ。鳥は羽の色の真白な、むくむくと太ったのを見立
てて買った。跡から持たせておこすということである。
石田は代を払って帰った。

牝鷄もを持って来た。虎吉は鳥屋を厩の方へ連れて行って
何か話し込んでいる。石田は雌雄めすおすを一しよに放して、雄
鷄が片々かたかたの羽をひろげて、雌の周囲まわりを半圈状に歩いて挑
むのを見ている。雌はとかく逃げよう逃げようとしてい
るのである。

間もなく、まだ外は明るいののに、鳥は不安の様子をして来た。その内、台所の土間の隅に棚たなのあるのを見付けて、それへ飛び上がろうとする。埒ねぐらを捜すのである。石田は別当に、「鳥を寝かすようにして遣れ」と云って居間に這はい入った。

翌日からは夜明に鶏が鳴く。石田は愉快だと思った。ところが午後引けて帰って見ると、牝鶏が二羽になってゐる。婆あさんに問えば、別当が自分のを一羽一しよに飼わせて貰もらいたいと云ったということである。石田は嫌いやな顔をしたが、咎とがめもしなかった。二三日立つうちに、

又牝鶏が一羽殖えて雄鶏共に四羽になった。今度のも別当ので、どこかから貫って来たのだというこゝ事であつた。石田は又嫌な顔をしたが、やはり別当には何とも云わなかつた。

四羽の鶏が屋敷中を齎あさつて歩く。薄井の方の茄子畠なすばたけに侵入して、爺さんに追われて帰ることもある。牝鶏同志で喧嘩けんかをするので、別当が強い奴を掴つかまえて伏籠に伏せて置く。伏籠はもう出来て来た新しいので、隣から借りた分は返してしまつたのである。鳥屋とやは別当が薄井の爺さんにことわつて、縁の下を為切しきつて拵こしらえて、入口に

は板切と割竹とを互違たがいちがいに打ち附けた、不細工な格子戸を嵌はめた。

或日婆あさんが、石田の司令部から帰るのを待ち受けて、こう云った。

「別当さんの鳥が玉子を生んだそうで、旦那様が上がるなら上げてくれえと云いなさりますが。」

「いらんと云え。」

婆あさんは驚いたような顔をして引き下がった。これからは婆あさんが度々卵たびたびの話をする。どうも別当の牝鶏に限って卵を生んで、旦那様のは生まないというのである。

る。婆あさんはこの話をするたびに、極めて声を小さくする。そして不思議だ不思議だという。婆あさんはこの話の裏面に、別に何物かがあるのを、石田に発見して貰いたいのである。ところが石田にはどうしてもそれが分らないらしい。どうも馬鹿なのだから、分らないでも為しようがない。そこでじれったがりながら、反復して同じ事を言う。しかし自分の言うことが別当に聞えるのは強こわいので、次第に声は小さくなるのである。とうとうしまいには石田の耳の根に摩すり寄って、こう云った。

「こねえな事を言うては悪うござりまするが、玉子は旦

那様の鳥も生まんことはござりませぬ。どれが生んでも、別当さんが自分の鳥が生んだというのでござりますがな。」

婆あさんはおそるおそるこう云って、石田が怒って大声を出さねば好いがと思っていた。ところが石田は少しも感動しない。平気な顔をしている。婆あさんはじれったくてたまらない。今度は別当に知れても好いから怒って貰いたいような気がする。そしてとうとう馬鹿に付ける薬はないとあきらめた。

石田は暫しばしばく黙もくっていて、極めて冷然としてこう云つ

た。

「己は玉子が食いたいときには買うて食う。」

婆あさんは齒痒はがゆいのを我慢するという風で、何か口の内でぶつぶつ云いながら、勝手へ下った。

七月十日は石田が小倉へ来てからの三度目の日曜日であつた。石田は早く起きて、例の狭い間で手水ちようずを使った。

これまでは日曜日にも用事があつたが、今日は始めて日曜日らしく感じた。寝巻の浴帷子ゆかたを着たままで、兵児帯へこおびをぐるぐると巻いて、南側の裏縁に出た。南国なんこくの空は紺青こんじよういろに晴れていて、蜜柑の茂みを洩もれる日が、きらきら

した斑紋はんもんを、花壇まわりの周囲の砂の上に印している。厩には馬の手入をする金櫛かなぐしの音がしている。折々馬が足を踏み更えるので、蹄鉄ていてつが厩の敷板に触れてことことという。そうすると別当が「こら」と云って馬を叱っている。石田は気がのんびりするような心持で、朝の空気を深く呼吸した。

石田は、縁の隅に新聞反古ほごの上に、裏と裏とを合せて上げてあった麻裏を取って、庭に卸して、縁から降り立った。

花壇のまわりをぶらぶら歩く。庭の井戸の石畳にいつ

もの赤い蟹のいるのを見て、井戸を上から覗くと、蟹は皆隠れてしまう。苔こけの附いた吊瓶つるべに短い竿さおを附けたのが抛り込んである。吊瓶と石畳との間を忙いそがしげに水馬みずすましが走っている。

一本の蜜柑の木を東へ廻ると勝手口に出る。婆あさんが味噌汁を煮ている。別当は馬の手入をしまつて、蹄ひづめに油を塗つて、勝手口に来た。手には飼桶かいおけを持っている。主人に会釈をして、勝手口に置いてある麦箱の蓋ふたを開けて、麦を飼桶に入れている。石田は暫く立って見ている。「いくら食うか。」

「ええ。これで三杯ぐらいが丁度宜よろしいので。」

別当はぎよろつとした目で、横に主人を見て、麦箱の中に抛り込んである、縁ふちの虧かけた轆轤ろくろ細工の飯鉢めしばちを取って見せる。石田は黙って背中を向けて、縁側の方へ引き返した。

花壇の処まで帰った頃に、牝鶏が一羽けたたましい鳴声をして足元に駈けて来た。それと一しよに妙な声が聞えた。まるで聒々くつわむし児の鳴くようにやかましい女の声である。石田が声の方角を見ると、花壇の向うの畠しきを為切つた、南隣の生垣の上から顔を出している四十くらいの子

がしもぶといる。下太りのかぼちやのように黄いろい顔で頭のとっぺんには、油固めの小さい丸まるまげ髻まげが載っている。これが声の主である。

何か盛んにしゃべっている。石田は誰に言っているかと思つて、自分の周囲まわりを見廻したが、別に誰もいない。石田の感ずる所では、自分に言つていゝとは思われない。しかし自分に聞せるた為ために言つていゝらしい。日曜日で自分の内うちにいるのを候うかがつていてしゃべり出したかと思われる。謂いわば天下に呼号して、旁かたわら石田をして聞かしめんとするのである。

言うことが好くは分からない。一体この土地には限らず、方言というものは、怒って悪口を言うような時、最も純粹に現れるものである。目上の人に物を言ったり何かすることになれば、修飾するから特色がなくなってしまう。この女の今しやべっているのが、純粹な豊前語ぶぜんごである。

そこで内のお時婆あさんや家主の爺さんの話と違って、おおよその意味は聞き取れるが、細かい nuances は聞き取れない。なんでも鶏が垣を躪こえて行って畠を荒らして困まるということらしい。それを主題にして堂々た

る Philippica を発しているのである。女はこんな事を言う。豊前には諺ことわざがある。何町歩とかの畑を持たないで、鶏を飼ってはならないというのである。然るに借屋せんえつずまいをしていて鶏を飼うなんぞというのは僭越せんえつもまたはなはだ甚しい。サアベルをさして馬に騎のっているものは何をしても好いと思うのは心得違である。大抵こんな筋であって、攻撃余力を残さない。女はこんな事も言う。鶏が何をしているか知らないばかりではない。傭婆やといばあさんが勝手の物をごまかして、自分の内の暮しを立てているのも知るまい。別当が馬の麦をごまかして金を溜ためようと

しているのも知るまい。こういふときは声を一層張り上げる。婆あさんにも別当にも聞せようとするのである。女はこんな事も言う。借家人の為することは家主の責任である。サアベルが強こわくて物が言えないようなら、サアベルなんぞに始から家を貸さないが好い。声はいよいよ高くなる。薄井の爺さんにも聞せようとするのである。

石田は花壇の前に棒のように立って、しゃべる女の方へ真向まむきに向いて、黙って聞いている。顔にはおりおり微笑の影が、風の無い日に木葉このはが揺らぐように動く外には、何の表情もない。軍服を着て上官の小言を聞いている時

と大抵同じ事ではあるが、少し筋肉が弛ゆるんでいるだけ違う。微笑の浮ぶのを制せないだけ違う。

石田はこんな事を思っている。鶏は垣を越すものと見える。坊主が酒を般若湯はんにやとうというところは世間に流布しているが、鶏を鑽籬菜さんりさいというところは本を読まな
いものは知らない。鶏を貰った処が、食いたくもなかつたので、生かして置こうと思った。生かして置けば垣も越す。垣を越すかも知れないということまで、初めに考
えなかったのは、用意が足りないようではあるが、何を為す
るにもそんな *éventualité* を眼中に置いては出来ようが

ない。鶏を飼うという事実には、この女が怒るといふ事実が附帯して来るのは、格別驚くべきわけでもない。なんにしろ、あの垣の上に妙な首が載っていて、その首が何の遠慮もなく表情筋を伸縮させて、雄弁を揮^{ふる}っている処は面白い。東京にいた時、光線の反射を利用して、卓の上に載せた首が物を言うように思わせる見世物を見たことがあった。あれは見世物師が余り *prétentieux* であつたので、こっちの反感を起して面白くなかつた。あれよりは此方が余程面白い。石田はこんなことを思っている。垣の上の女は雄弁家ではある。しかしいかなる雄弁家

も一の論題に就いてしゃべり得る論旨には限がある。垣の上の女もとうとう思想が涸渴こかつした。察するに、彼は思想の涸渴を感ずると共に失望の念を作なすことを禁じ得なかつたであろう。彼は経験上こんな雄弁を弄ろうする度に、誰か相手になつてくれる。少くも一言くらい何とか言つてくれる。そうすれば、水の流が石に触れて激するようにな、弁論に張合が出て来る。相手も雄弁を弄することになれば、旗鼓相当きこつて、彼の心が飽き足るであろう。彼は石田のような相手には始て出逢つたであろう。そして暖簾のれんに腕押をしたような不愉快な感じをしたであろう。

彼は「ええとも、今度来たら締めてしまうから」と言い放って、境の生垣の蔭へ南瓜かぼちゃに似た首を引込めた。結末は意味の振ふるっている割に、声に力がなかった。

「旦那さん。御膳が出来ましたが。」

婆あさんに呼ばれて、石田は朝飯を食いに座敷へ戻った。給仕をしながら婆あさんが、南裏の上さんは評判の悪者で、誰も相手にならないのだというような意味の事を話した。石田はなるたけ鳥を伏籠に伏せて置くようにしろと言いつけた。その時婆あさんは声を低うしてこういうことを言った。主人の買って来た、白い牝鶏が今朝

は卵を抱いている。別当も白い牝鶏の抱いているのを、外の牝鶏が生んだのだとは言いにくいと見えて黙っている。卵をたった一つ孵かえさせるのは無駄だから、取って来ようかと云うのである。石田は、「抱いているなら構わずに抱かせて置け」と云った。

石田は飯を済ませてから、勝手へ出て見た。まだ縁の下とやの鳥屋の出来ない内に寝かしたことのある、台所の土間の上の棚が藁わらを布しいたままになっていた。白い牝鶏はその上に上がっている。常からむくむくした鳥であるのが、羽を立てて体をふくらまして、いつもの二倍位のおおき大

さになって、首だけ動かしてあちこちを見ている。茶碗を洗っていた婆あさんが来て鳥の横腹をつつく。鳥は声を立てる。石田は婆あさんの方を見て云った。

「どうするのだ。」

「旦那さんに玉子を見せて上ぎようと思ひまして。」

「よ廃せ。見んでも好い。」

石田は思ひ出したように、婆あさんにこう云うことを問うた。世帯を持つとき、ます枺を買った筈だが、別当はあれで麦を量りはしないかと云うのである。婆あさんは、別当の枺を使ったのは見たことがないと云った。石田は

「そうか」と云って、ついと部屋に帰った。そして将校行李の蓋を開けて、半切毛布に包んだ箱を出した。

Havana の葉巻である。石田は平生天狗てんぐを呑のんでいて、これならどんな田舎いなかに行軍をしても、補充の出来ない事はないと云っている。偶たまには上等の葉巻を呑む。そして友達と雑談をするとき、「小説家なんぞは物を知らない、金剛石入こんごうせきの指環ゆびわを嵌はめた金持の主人公に Manila を呑ませる」なぞと云って笑うのである。石田が偶に呑む葉巻を毛布にくるんで置くのは、火薬の保存法を応用しているのである。石田はこう云っている。己おれだって大将にで

もなれば、烟草たばこも毎日新しい箱を開けるのだ。今のうち
 は箱を開けてからひとつき一月も保存しなくてはならないのだか
 ら、工夫を要すると云っている。

石田は葉巻に火を付けて、さも愉快げに、一吸ひとつすい吸って、
 例の手習机に向った。北向の表庭は、百日紅さるすべりの疎まばらな葉
 越に、日が一ぱいにさして、夾竹桃にはもうところどころ
 ろ花が咲いている。向いの内の糸車は、今日もぶうんぶ
 うんと鳴っている。

石田は床の間の隅に立て掛けてある洋書の中から La
 Bruyère の性格という本を抽ぬき出して、短い鋭い章を一

つ読んではじつと考えて見る。又一个つ読んではじつと考
えて見る。五六章も読んだかと思うと本を措おいた。

それから舶来ぞうげしの象牙紙と封筒との箱入になっているの
を出して、ペンで手紙を書き出した。石田はペンと鉛筆
とで万事済ませて、硯すずりというものを使わない。稀まれに願
届ひきこもりなぞがいれば、書記に頼む。それは陸軍に出てから病
気引籠ひきこもりをしたことがないという位だから、めつたにい
らない。

人から来た手紙で、返事をしなくてはならないのは、
函囊ずのうの中に入れていたのだから、それを出して片端から

返事を書くのである。東京に、中学に這入っている息子を母に付けて置いてある。第一に母に遣る手紙を書いた。それから筆を措かずに二つ三つ書いた。そして母の手紙だけを将校行李にしまって、外の手紙は引き裂いてしまった。

午ひるになった。飯を済ませて、さつき手紙を書き始めるとき、灰皿の上に置いた葉巻の呑みさしに火を付けて、北表の縁えんに出た。空はいつの間にか薄い灰色になっている。汽車の音がする。

「蝙蝠傘張替修繕は好うがすの」と呼んで、前の往来を

通るものがある。糸車のぶうんぶうんは相変わらず根調をなしている。

石田はどこか出ようかと思つたが、空模様が変わつていたので、止めるや気になつた。暫くして座敷へ這入つて、南アフリカの大きい地図をひろげて、この頃戦争が起りそうになつている Transvaal の地理を調べている。こんな風で一日は暮れた。

三四日立つてからの事である。もう役所は午引ひるひけになつている。石田は馬ていつつに蹄鉄ていつつを打たせに遣つたので、司令部から引掛ひきがけに、紫川むらさきがわの左岸さがんの狭い道を常磐橋の方へ歩い

ていると、戦役せんえき以来心安くしていた中野という男に逢った。中野の方から声を掛ける。

「おい。今日は徒歩かい。」

「うむ。鉄を打ちに遣ったのだ。君はどうしたのだ。」

「僕のは海に入れに遣った。」

「そうかい。」

「非常に喜ぶぜ。」

「そんなら僕も一遍遣って見よう。」

「別当が泳げなくちやあだめだ。」

「泳げるような事を言っていた。」

中野は石田より早く卒業した士官である。今は石田と同じ歩兵少佐で、大隊長をしている。少し太り過ぎている男で、性質から言えば老实家である。馬をひどく可哀がる。中野は話を続けた。

「君に逢ったら、いつか言つて置こうと思つたが、ここには大きな溝どぶに石を並べて蓋ふたをした処があるがなあ。」

「あの馬借ばしやくに往ゆく通だらう。」

「あれだ。魚町うおまちだ。あの上を馬で歩いちやあいかんぜ。」

馬は人間とは目方が違うからなあ。」

「うむ。そうかも知れない。ちつとも気が附かなかつた。」

こんな話をして常磐橋に掛かった。中野が何か思い出したという様子で、歩度を緩めてこう云った。

「おう。それからも一つ君に話して置きたいことがある。馬鹿な事だがなあ。」

「何だい。僕はまだ来たばかりで、なんにも知らないんだから、どしどし注意を与えてくれ給え。」

「実は僕の内の縁がわからは、君の内の門が見えるので、妻さいの奴が妙な事を発見したというのだ。」

「はてな。」

「君が毎日出勤すると、あの門から婆あさんが風炉敷包ふろしきづつみ

を持って出て行くというのだ。ところが一昨日おとつだったか
と思う、その包が非常に大きいというので、妻がひどく
心配していたよ。」

「そうか。そう云われれば、心こころあたり当がある。いつも漬物
を切らすので、あの日には茄子と胡瓜を沢山に漬けて置
けと云ったのだ。」

「それじゃあ自分の内へも沢山漬けたのだらう。」

「はははは。しかしとにかく難有ありがとう。奥さんにも宜しく
云ってくれ給え。」

話しながら京町の入口まで来たが、石田は立ち留まっ

た。

「僕は寄って行く処があつた。ここで失敬する。」

「そうか。さようなら。」

石田は常磐橋を渡つて跡へ戻つた。そして室町むろまちの達見たつみへ寄つて、お上さんに下女を取り替えることを頼んだ。お上さんは狛ちんの頭をさすりながら、笑つてこう云つた。

「あんた様は婆あさんがええとお云いいなされたがな。」

「婆あさんはいかん。」

「何かしましたかな。」

「何もしたのじゃない。大分えらそうだから、丈夫な若

いのをよこすように、口入の方へ頼んで下さい。」

「はいはい。別品さんを上げるように言うて遣ります。」

「いや、下女に別品は困る。さようなら。」

石田はそれからかえりがけ帰掛に隣へ寄つて、薄井の爺じいさんに、

下女の若いのが来るから、どうぞお前さんの処の下女を夜だけ泊りに来させて下さいと頼んだ。そして内へ帰つて黙っていた。

翌日口入の上さんが来て、お時婆あさんに話をした。

年寄に骨を折らせるのが気の毒だと、旦那が云うからと云ったそうである。婆あさんは存外素直に聞いて帰るこ

とになった。石田はまだ月の半ばであるのに、一箇月分の給料を遣った。

夕方になって、口入の上さんは出直して、目見えめみの女中を連れて来た。二十五六位の髪かみの薄い女で、お辞儀をしながら、横目で石田の顔を見る。襦袢じゆばんの袖そでにしているみずあさぎ水浅葱みずあさぎのめりんすが、一寸位袖口から覗のぞいている。

石田は翌日島村を口入屋へ遣って、下女を取り替えることを言い付けさせた。今度は十六ばかりの小柄で目のくりくりしたのが来た。気性きせいもはきはきはきはきしているらしい。これが石田の気に入った。

二三日置いてみて、石田はこれに極めた。比那古ひなこのもので、春かっぱつというのだそうだ。男ひこことばのような肥後詞つかを遣つかつて、動作も活潑である。肌こはくに琥珀色つやの沢つやがあつて、筋肉が締ませいっている。石田は精悍せいかんな奴だと思つた。

しかし困る事には、いつも茶たてじまの豎縞ひとえものの単物ひとえものを着ているが、膝ふたところの処ふたところには二所ふたところばかりふたところつぎが当ふたところっている。それで給仕ふたところをする。汗臭い。

「着物はそれしか無いのか。」
「ありまっせん。」

平気で微笑を帯びて答える。石田は三枚ふたところ持っている

浴帷子ゆかたを一枚遣やった。

一週間程立った。春と一しよに泊らせていた薄井の下女が暇を取って、師団長の内へ住み込んだ。春の給料が自分の給料の倍だといっているので、羨うらやましがって主人を取り替えたそうである。そこで薄井では、代かわりに入れた分の下女を泊りによこさないことになった。石田は口入の上さんと呼んで、小女こおんなをもう一人傭やといたいと云った。上さんが、そんなら内の娘をよこそうと云って帰った。

口入屋の娘が来た。年は十三で久といっているのである。色の真黒な子で、頗すこぶる不潔で、頗る行儀が悪い。翌朝五

時頃にぷつという妙な音がするので、石田は目を醒まし
た。後に聞けば、勝手では朝起きて戸を開けるまで、
提灯ちようちんに火を附けることにしている。提灯の柄えの先に鉤かぎ
が附いているのを、春はいつも長押ながしの釘くぎに懸けていたの
だそうだ。その提灯を久に持つていろと云ったところが、
久が面倒がって、提灯の柄で障子を衝つき破やぶって、提灯を
障子にぶら下げたということである。石田は障子に穴の
あるのが嫌きらひで、一々自分で切張きりをしているのだから、
この話を聞いて嫌いやな顔をした。

石田は口入屋の上さんと呼んで、久を返したいと云つ

た。返して代を傭う積つもりであつた。ところが、上さんは何が悪いか聞いて直させると云う。何一つ悪くないことのない子である。石田は窮して、なんにも悪くはない。女中は一人で好いと云つた。

石田は達見に往つて、第二の下女の傭聘ようへいを頼んだ。お上さんは狎をいじりながら、石田の話聞いて、にやりにやり笑っている。そしてこう云うのである。

「あんたさん、立派なお妾めかけでも置きなさればええにな。」
 「馬鹿な事を言つちやいかん。」

とにかく頼むと言い置いて、石田は帰つた。しかし第

二の下女はなかなか来ない。石田はどうとう若い下女一人を使っていることになった。

三四日立った。七月三十一日になった。朝起きて顔を洗いに出ると、春が雛ひよこの孵かえたのを知らせた。石田は急いで顔を洗って台所へ出て見た。白い牝鶏の羽の間から、黄いろい雛の頭が覗のぞいているのである。

商人が勘定を取りに来る日なので、旦那ひるが帰ってから払うと云えと、言い置いて役所へ出た。午ひるになって帰ってみると、待っているものもある。石田はノオトブックにペンで書き留めて、片端から払った。

晩になってから、石田は勘定を当ってみた。小倉に来てから、始て纏まとまった一月間の費用を調べることが出来るのである。春を呼んで、米はどうなっているかと問うてみると、丁度米櫃こめびつが虚からになって、跡は明日持あしたって来るのだと云う。そこで石田は春を勝手へ下らせて、跡で米の量を割ってみた。陸軍で極きめている一人一日精米六合というのを廻はるかに超過している。石田は考えた。自分はどうしても兵卒の食う半分も食わない。お時婆あさんも春も兵卒ほど飯を食いそうにはない。石田は直すぐにお時婆あさんの風炉敷包の事を思い出した。そして徐しずかにノオ

トブツクを将校行李の中へしまつた。

八月になつて、司令部のものもてんでに休暇を取る。

師団長は家族を連れて、船小屋の温泉へ立たれた。石田は纏まつた休暇を貰わずに、隔日に休むことにしている。

表庭の百日紅に、ぽつぽつ花が咲き始める。おりおり蝉せみの声に向いの家の糸車の音にまじる。六日は日曜日で、

石田の処ところへも暑中見舞の客が沢山来た。初め世帯を持

つときに、渋紙しぶがみのようなもので拵こしらえた座布団を三枚買

つた。まだ余り使わないのに中に入れた綿が方々に寄つて塊かたまりになっている。客が三人までは座布団を敷かせる

ことが出来るが、四人落ち合うと、畳んだ毛布の上に据すわらせられる。今日なぞはとうとう毛布に乗ったお客があつた。

客は大抵帷子かたびらに袴はかまを穿はいて、薄羽織もちろんを被きて来る。薄羽織は勿論、袴はかまというものも石田なぞは持っていないのである。石田はこんな日には、朝から夏衣袴なついこを着て応対する。

客は大抵同じような事を言つて帰る。今年は暑が去年より軽いようだ。小倉は人気が悪くて、物価が高い。殊ことに屋賃をはじめ、将校の階級によつて価あたいが違ちがうのは不

都合である。休暇を貰っても、こんな土地では日の暮らしようがない。町中まちじゆうに見る物はない。温泉場に行くにしても、二日市ふっかいちのような近い処はつまらず、遠い処は不便で困る。先ずこんな事である。石田は只はあ、はあと返事をしている。

中には少し風流がって見る人もある。庭の方を見て、海が見えないのが遺憾だと云ったり、掛物を見て書画の話をしたりする。石田は床の間に、軍人に賜わった勅語を細字に書かせたのを懸けている。これを将校行李に入れてどこへでも持って行くばかりで、外に掛物というも

のは持つていないのである。書画の話なんぞが出ると、自分には分らないと云つて相手にならない。

翌日あたりから、石田も役所へ出掛に、師団長、旅団長、師団の参謀長、歩兵の聯隊長れんたい、それから都督と都督部参謀長との宅位に名刺を出して、それで暑中見舞を済ませた。

時候は段々暑くなつて来る。蝉の声が、向いの家の糸車の音と同じように、絶間なく聞える。夕風ゆうなぎの日には、日が暮れてから暑くて内にいいにくい。さすがの石田も湯帷子ゆかたに着更きかえてぶらぶらと出掛ける。初のうちは小倉こくら

の町を知ろうと思つて、ぐるぐる廻つた。南の方は馬借から北方きたかたの果まで、北方には特科隊が置いてあるので、好く知っている。そこで東の方へ、舟を砂の上に引き上げてある長浜の漁師村のはずれまで歩く。西の方へ、道普請に使う石炭屑が段々少なくなつて、天然の砂の現れて来る町を、西鍛冶屋かじや町のはずれまで歩く。しまいには紫川の東の川口で、旭町あさひまちという遊廓ゆうかくの裏手になっている、お台場の址あとが涼むには一番好いと極めて、材木の積んであるのに腰を掛けて、夕風の蒸暑い盛を過すことにした。そんな時には、今度東京に行つたら、三本足の床几しょうぎを買

つて来て、ここへ持って来ようなんぞと思っている。

孵かえた雛ひよこは雌であつた。至極丈夫で、見る見る大きくなる。大きくなるに連れて、羽の色が黒くなる。十日ばかりで全身真黒になつてしまつた。まるで鴉からすの子のようである。石田が掴つかまえようとすると、親鳥が鳴くので、石田は止やめてしまふ。

十一日は陰曆の七夕たなばたの前日である。「笹ささは好しか」と云つて歩く。翌日になつて見ると、五色の紙に物を書いて、竹の枝に結び附けたのが、家毎いえごとに立ててある。小倉にはまだ乞巧きこう奠でんの風俗が、一般に残っているのである。

十五六日になると、「竹の花立はなたてはいりませんか」と云って売って歩く。盃蘭盆うらぼんが近いからである。

十八日が陰暦の七月十三日である。百日紅の花の上に、雨が降ったり止んだりしている。向いの糸車は、相変らず鳴っているが、蟬の声は少しとぎれる。おりおり生垣の外を、跣足はだしの子供が、「花柴はなしば々々」と呼びながら、走って通る。櫛しきみを売るのである。雨の歇やんでいる間は、ひどく蒸暑い。石田はこの夏中で一番暑い日のように感じた。翌日もやはり雨が降ったり止んだりして蒸暑い。夕方に町に出てみると、どの家にも盆燈籠ぼんどうろうが点ともしてある。

中には二階を開け放して、数十の大燈籠を天井に隙間なく懸けている家がある。長浜村まで出てみれば、盆踊が始まっている。浜の砂の上に大きな圈わを作って踊る。男も女も、手拭ほわかむりの頬冠ほわかむりをして、着物の裾を片折はしよって帯はさに挟はさんでいる。襪たびはだしもあるが、多くは素足である。女で印しるし絆ばん纏てんに三尺帯を締め、股引ももひきを穿はかずにいるものもある。口々くどきに口説くどきというものを歌って、「えとさっさと囃はやす。好よいとさの訛なまりであろう。石田は暫く見ていて帰った。

雛は日にまし大きくなる。初のうち油断なく庇かばって

た親鳥も、大きくなるに連れて構わなくなる。石田は雛を畳の上に持って来て米を遣る。段々馴れて手掌てのひらに載せた米を啄ついばむようになる。又少し日が立って、石田が役所から帰って机の前に据わると、庭に遊んでいたのが、走って縁に上って来て、鶴嘴つるはしを使うような工合に首を *sagittale* の方向に規則正しく振り動かして、膝の傍そばに寄るようになる。石田は毎日役所から帰掛かえりがけに、内が近くなるると、雛の事を思い出すのである。

八月の末に、師団長は湯治場とうじばから帰られた。暑中休暇も残少なくなった。二十九日には、土地のものが皆地蔵

様へ詣るとい^{まい}うので、石田も寺町へ往つて見た。地蔵堂の前に盆燈籠の破れたのを懸け並べて、その真中に砂を山のように盛つてある。男も女も、線香に火を附けたのを持って来て、それを砂に立てて置いて帰る。

中一日置いて三十一日には、又商人が債^{かけ}を取りに来る。石田が先月の通に勘定をしてみると、米がやっぱり六月と同じように多くいつている。今月は風炉敷包を持ち出す婆あさんはいなかつたのである。石田は暫く考えてみたが、どうも春はお時婆あさんのような事をしそうにはない。そこで春を呼んで、米が少し余計にいるようだが

どう思うと問うて見た。

春はくりくりした目で主人を見て笑っている。彼は米の多くいるのは当前だと思うのである。彼は多くいるわけを知っているのである。しかしそのわけを言っいて好いかどうかと思つて、暫く考えている。

石田は春に面白い事を聞いた。それは別当の虎吉が、自分の米を主人の米櫃こめびつに一しよに入れて置くという事実である。虎吉の給料には食料が這入っている。馬糧なんぞは余り馬を使わない司令部勤務をしているのに、定則だけの金を馬糧屋に払っているのだから虎吉が随分利益

を見ているということ、石田は知っている。しかし馬さえ瘦^やせさせなければ好いと思つて、あなぐろうとはしない。そうしてあるのに、虎吉が主人の米櫃に米を入れて置くことにして、勝手に量り出して食うというに至つては、石田といえども驚かざることを得ない。虎吉は米櫃の中へ、米をいくら入れるか、何遍入れるか少しも分らないのである。そうして置いて、量り出す時にはいくらでも勝手に量り出すのである。段々春の云うのを聞いて見れば、味噌も醤油も同じ方法で食っている。内で漬ける漬物も、虎吉が「この大きい分は己おれの茄子だ」と云

って出して食うということである。虎吉は食料は食料で取って、実際食う物は主人の物を食っているのである。春は笑ってこう云った。割木わりきも別当さんの「見せ割木」で、いつまで立っても減ることはないと言った。勝手道具もそうである。土間に七釐しちりんが二つ置いてある。春の来た時に別当が、「壊れているのは旦那ので、満足なのは己のだ」と云った。その内に壊れたのがまるで使えなくなったので、春は別当と同じ七釐で物を煮にる。別当は「旦那の事だから貸して上げるが、手めえはお辞儀をして使え」と云っているということである。

石田は始て目の開いた^あような心持がした。そして別当の手腕に対して、少からぬ敬意を表せざることを得なかつた。

石田は鶏の事と卵の事とを知っていた。知って黙許していた。然るに鶏と卵とばかりではない。別当には *systematiquement* に発展させた、一種の面白い経理法があつて、それを万事に適用しているのである。鶏を一しよに飼つて、生んだ卵を皆自分で食うのは、唯この *systeme* を鶏に適用したに過ぎない。

石田はこう思つて、覚え^{ほほえ}ず微笑^{ほほえ}んだ。春が、若^もし自分

のこんな話をしたことが、別当に知れては困るというのを、石田はなだめて、心配するには及ばないと云った。

石田は翌日米櫃やら、漬物桶やら、七釐やら、いろいろなものも島村に買い集めさせた。そして虎吉を呼んで、これまでであった道具を、米櫃には米の這入はいっているまま、漬物桶には漬物の這入はいっているまま、みんな遣って、平気な顔をしてこう云った。

「これまで米だの何だのが、お前のと一しよになつていたそうだが、あれは己が気が附かなかつたのだ。己は新しい道具を買ったから、これまでの道具はお前に遣る。

まだこの外にもお前の物が台所にまぎれ込んでいるなら、遠慮をせずに皆持つて行つてくれい。それから鶏が四五羽いるが、あれは皆お前に遣るから、食うとも売るとも、勝手にするが好い。」

虎吉は呆れた^{あき}ような顔をして、石田の云うことを聞いていて、石田の詞^{ことば}が切れると、何か云いそうにした。石田はそれを言わせずにこう云った。

「いや。お前の都合はあるかも知れないが、己はそう極めたのだから、お前の話を聞かなくても好い。」

石田はついと立って奥に這入った。虎吉は春に、「旦

那からお暇ひまが出たのだかどうだか、伺うかがってくれる」と頼んだ。石田は笑って、「己はそんな事は云わなかったと云え」と云った。

その晩は二十六夜待やまちだといふので、旭町で花火が上がある。石田は表側の縁に立たって、百日紅の薄黒い花の上で、花火の散るのを見ている。そこへ春が来て、こう云いった。

「今別当さんが鶏を縛むすって持もって行きいります。雛ひよこは置おこうかと云いいますが、置おけと云いまっしょうか。」

「雛ひよこなんぞはいらんと云いえ。」

石田はやはり花火を見みていた。

日本文学電子図書館

山椒大夫・高瀬舟

著 者：森 鷗外

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館